

## 初めての野菜作りに挑戦

宮澤 榮子

一昨年、終の棲家となる土地を求めて、初めて鹿追の地を見た時、街の家々には、所狭しと並べた美しい花々や、南西には日高山脈があり、北には遠く大雪の山並みを望むロケーションに、主人とここ鹿追にと即決した。

「やっぱり山がある風景はいい」と主人。手で四角い額縁を作りながら「絵になるねー」と私。幼少から絵を描く時は必ずバックに山々を入れたものだ。生まれ育ったふるさとの山々の風景なのである。

一昨年初秋より工事が始まり、主人の勤務休みには釧路から幾度となく鹿追を訪れた。冷たい秋風が吹き始めた十一月末。な・なんと！強い西風にあおられて周りの畑から渦を巻きながら舞う土ぼこりが足元を通り抜け、髪の毛が逆立った。十二月に入り雪が降り出すと猛吹雪。目も鼻も両手で覆い、上半身を風に負けないよう傾けながら必死に足を踏ん張った。とんでもない場所に居を決めたものだ。半

端な風じゃない。さぞかし大工さんも大変であろうと思った。

風が比較的強い十勝に生まれ育った私でも、こんな強風はめつたにお目にかかったことがない。いや昔から強風はあったけれど今まで町なかに住まいがあつたので家々が風よけになっていたのかもしれない。

この土地で家庭菜園や花作りを楽しめるのだろうか、少々不安になつたが、この地に決めたのだから覚悟しなければならぬと……。

三月末に引越して五月末ともなると、すっかり雪も融けてカッコウが鳴き、いよいよ待ちに待った野菜作りの一年生の出番がやってきた。

タオルで頬被りをし、農作業用のつば広帽子を深々とかぶり、サンダラスをし、古い下着再利用の手作り腕抜きをつけた様は、月光仮面か、はたまた鞍馬天狗か(古い……)という異様ないでたちである。

鏡を見てその姿に自分でも吹き出してしまった。主人はげらげら笑う。良いではないか。年を取ると日焼けも元にもどらぬのである。気にしない気にしない。

プランターでパセリやラディッシュより作つたことがない私だが、早速

「野菜作りのコツ」なる参考書を片手に、農協から購入したトマト、ナス、キュウリ、ピーマンの苗を植える。主人が鍬（さすがに畑が広いのでこの後小型耕運機を購入した）で耕してくれた後、元肥に有機肥料を入れ、遅霜に会いながらも何個か買い足して、時々追肥をしながら土寄せし、整枝や支柱に誘引するなど、参考書を見ながらの挑戦であった。「どじょういんげん」「絹さや」「紫蘇」「ズッキーニ」「ラディッシュ」「南瓜」「スイカ」「ジャガイモ」「モロッコ」「人参」「ホーレンソウ」「とうもろこし」「赤カブ」「大根」「アスパラ」「アスパラ菜」「キュウリ」「トマト」「ミニトマト」「茄子」「イチゴ」等々の野菜の栽培に挑戦した。地主の太田さんからも手作りの苗を何個かいただいた。

害虫や病気に悩まされ、「参考書通りには行かないわ!」とわめきながらも、種をまき、小さな芽が出、実をつけた時の喜び。「良くぞここまで成長してくれました。」と野菜がいとおしく、「おいしく食べてあげるから大きくなつてね」と話しかける。

初めてのキュウリを口にしたときの美味しさは格別である。苦勞して

作った者だけに判る喜びである。「頑張ったね」と野菜と自分をほめてあげた。

毎日のようにスイカの大きさを観察して「何センチかな?」が「ビール」となり、「ピンポン球」から「サッカーボール位の大きさになったよ」とうれしそうな主人。

まだまだ幼いとげが多くても待ちきれずに収穫した「キュウリ」。かわいいサヤをつけて、一・二日見ないとびつくりするほど大きくなる「いんげん」や「絹さや」。

すばらしく肉厚でいかにもみずみずしく美味しそう、でもなかなか色がつかずに待ちきれず青いまま食べてしまった「カラーピーマン」。何もせず放っておいても多くの実をつけてくれる「ミニトマト」。

大きな葉にびつくりした「ズッキーニ」は、雨が降るたびに腐って大きな実にならないので、思い切り何個か間引きしたらなんとその後は次から次へと実がつき大収穫となった。

「トマト」も雨を防ぐのにビニールで簡易天井を作つてやったが、雨のた

びビニールのくぼみに雨がたまって困ったことや、「ジャガイモ」(インカの目覚め)も、花柄だけ、ある日、虫なのか鳥なのか一日で全部食べられていたこと。貧乏根性を出して「人参」「大根」「蕪」は間引きの後の芽を、開き過ぎたところへ移植してみたが、結局は成長しないことがわかったこと。また、あぶら菜科の便利菜なる葉に地ノミとやらが大量発生し葉が孔だらけになってしまったこと。

それから、あまり葉が混んでいたので間引きしようとツルを探りながら切ったのはよいが、未熟とはいえ一番大きな実をつけていた「南瓜」を、ツルごと切ってしまった失敗。「大根」の葉にびっしりとついた蛾か蝶の幼虫や、ぼつちやり太い青虫を主人と葉をちぎってはこれでもかと思われ踏み潰した。「殺虫剤なし」「化学肥料なし」もなかなか大変である。

しかし、虫食いも変形でも良いではないか。安心しておいしく食べられることが一番である。十月十四日から十五日頃の初霜でトマト、ナス、ピーマンがまだ実を沢山つけていたのに全滅してしまったことは今でも

悔しい。

京都や東京に住む姉に何度も野菜を送ったが、「貴女がこんなにも野菜が作れるなんて、おいしくいただいているよ」と電話の向こうで涙ぐんでいるのを聞くと、苦労や失敗もみな吹き飛んでしまう。戦中、戦後にかけて食糧難であったころには、下肥えを利用し、農家の畑を少し借りて、小さな食べ盛りの子供達のために、朝から晩まで野菜作りをしていた母の姿が目には焼きついている。

現在では家庭菜園も便利な耕運機や、汚れずに使いやすい肥料があり、母の苦労には到底及ばないが土いじりの好きな母のDNAが私にも備わっているらしい。

昨年晩秋には、主人がたつぷりの堆肥を耕運機で鋤き込んでくれた。今年はまだ何か珍しい野菜に挑戦してみようと、今からわくわくしながら春を待っている。